

令和5年度協働パイロット事業新規事業二次審査 会議録

開催日時 令和5年6月6日(月) 午前9時00分から午後12時30分まで

出席者 委員 川村 美智、田中 志保、深野 裕士、静賀 誠
事務局 田中 雄基、渡井 亮祐、大石 涼馬

会議内容

1 新規事業二次審査説明 <事務局>

2 議事

(1) 特定非営利活動法人ルークス

ア 企画説明 <団体>

イ 発言等

(田中委員)

団体が普段実施しているDV加害者相談は、年間何件あるか。

(団体)

デートDVに係る事業を主に実施しているため、分野は限られるが、年間十数件ほどの相談を受けている。

(田中委員)

どのような人が加害者更生支援プログラムに参加するかは調査をしているか。

(団体)

現在、加害者更生カウンセリングを実施する松林カウンセリングルームの松林先生に話を伺っている。

(田中委員)

今回の事業提案をするにあたり、参考にした加害者更生支援団体はあるか。

(団体)

数年前に国が加害者更生支援について触れており、その中で支援団体がどのような事業をしているかを参考に今回の事業内容を練っていった。但し、支援団体の名前は資料の中では伏せられていたので不明である。自分たちが思い描く事業を実施している団体が全国的に少なく、把握しているのは2団体ほどである。

(田中委員)

その2団体の団体名はわかるか。

(団体)

すぐには回答ができない。

(田中委員)

自分が知っている団体では、「GADHA」という団体がある。加害者の当事者性を確認しながら、ピアカウンセリングを実施している。アメリカでは、ランディ・バンクロフトという方が30年ほどDV被害者支援をしている。

(静賀委員)

団体が実施するのは、加害者更生支援ではなく、加害者更生支援プログラムを紹介するイメージでよいか。

(団体)

担当課が課題テーマとして募集していたのは、まず加害者更生支援の情報整備をしたいというものであった。今年度事業では、静岡の加害者更生支援の情報整備を実施したい。但し、先ほど田中委員からあったとおり、自らを加害者であると自覚している加害者は情報を見てすぐに参加する。私たちが危惧しているのは、加害者であるが自分が加害者だという立場に気づいてない方である。そのような方にもアカウントを見ることでアプローチをし、自分が加害者かもしれないという気付きにつなげたいと考えている。

(静賀委員)

この事業では加害者ということを感じさせるのが目的でよいか。

(団体)

その通りである。そのなかでワークショップや、加害者更生支援の相談についても実施をしていきたい。

(静賀委員)

承知した。

(深野委員)

アカウントの導線について、最後に各支援先に繋ぐということだが、団体としてリファー先あるいは各支援先との連携は今後どのように考えられているのか。

(団体)

現状、静岡市は加害者更生支援が進んでおらず、一般的な検索をして調査が可能であったのが3団体であった。この3団体については、事業の中で連携をしていく。その3団体との繋がりや他の団体があるのであれば、逐一連携をしていく予定である。但し、1年間でできることは限界があるため、2年目も含めて拡大していきたい。1年目については、加害者更生支援のプラットフォーム構築を重点に実施していく。

(川村委員)

加害者更生支援の情報発信をしたときのリスクについてどのように考えているか。例えば、加害者更生支援というテーマを発信したためにプラットフォームであるInstagramのアカウントを不特定多数のアカウントから攻撃を受けたり、アカ

アカウントにアクセスした人が攻撃されるリスクは想定されているか。

(団体)

SNSを利用するメリットとして、ホームページであればアクセスした人の情報や、お問い合わせをした際に個人情報が残ったりするが、Instagramを通した場合、1ユーザーとして権限を持たないので、このアカウントを攻撃されたからといって個人情報が漏洩するということは考えにくい。かつ、SNSの中でもInstagramが高い水準でセキュリティ対策をしているということも理由の一つである。様々な企業でも広報媒体にInstagramが採用されている。アクセスする方の個人情報の取扱いについては、ワークショップなどのプログラムに参加する方との連絡についてはSNSではなく、団体のメールアドレスを使用したり、電話での対応とするなど、慎重に取り扱う。

(川村委員)

DV被害の事例から考えても、リスク想定は綿密にする必要がある。また、ポータルサイトを運営している団体への加害もあり得る。

(団体)

加害者更生支援には、まず加害者自身の行動心理を認めるところからスタートする。なぜ自分が加害行動に至ってしまったのかという感情のセルフコントロールなどを見直さなければDVは終わらないと考えている。その中で、認める部分と正さなければならない部分を発信していきたい。団体として加害者更生支援を理由として、攻撃の対象になるとは思っていない。但し、委員の言うとおり団体に対して加害があったとしても、誰かがやらなければならないことという認識をしている。

(2) つながりあはず

ア 企画説明 <団体>

イ 発言等

(田中委員)

ライフデザインに参加した人はどれくらいか。

(団体)

何度も受講する人もいるので、延べ数にはなるが、3年間で1,200人程度参加している。

(田中委員)

参加者は静岡市内在住の人か。

(団体)

静岡市在住もしくは静岡市に通勤する人である。

(田中委員)

対象が3年間のライフデザインに参加された方とのことだが、参加した方がハブになって色々な地域でやっていくようなイメージか。

(団体)

委員からの質問の言葉を使うと、リンクワーカーのようなイメージ。但し、専門家ではないので、地域の中で生きているお互いとしてハブになっていくような役割を担っていけるようにしたい。

(田中委員)

本音が出せる会場設定のポイントについて、自分も居場所事業をやっているが、参加者の地元だと本音が出せないという方がいる。本音を出せる地元愛、プライバシー、快適な空間をどう考えているか。

(団体)

参加者の中にはもちろん、地元で参加したくない方もいるので、例えば駿河区、葵区、清水区というように満遍なく開催したいと考えている。但し、場所自体に思い入れがある方の会場を使うことによって、会場に入っただけ参加者の気分が高揚するといった経験をこれまでたくさんしてきた。地元愛というのは地元の方同士だけでなく、その場所に思いを込めて生きている方の生きざまに触れるという意味合いで地元愛という言葉を使っている。

(田中委員)

ライフデザインに参加された方は外に出られる、表に出られる方なので、力がある方である。外に出られない方はどうしたらよいか。

(団体)

実際にそのような方はいる。ワークショップは大人数で話すので、ハードルが高い方がいる。前段階でダイアログとあって、一人だけで話を聞くような場の設定もやっている。但し、それも難しい方もいる。その場合はアウトリーチとあって、自宅に伺ったり、本人が安心安全で行ける場所があれば、そこに団体が行って話を聞くということもある。また、そのような方は、地域のつながりのある民生委員などが繋がっているケースがあるので、その方に紹介してもらい信頼関係を構築している。

(田中委員)

既にそのようなことをしているか。

(団体)

そのとおりである。

(静賀委員)

今の説明は、団体が普段実施されている事業についてか。

(団体)

そのとおりである。

(静賀委員)

今回の提案は、今まで説明したものとは違うという認識でよいか。

それとも、説明であったことを含めて実施するということか。

(団体)

支援をする方の困っていることや課題を中心に何をするという団体であり、課題解決にライフデザインという手法が合致していると思っている。必要があればパイロット事業の中でも先ほどのようなアプローチが必要だと思っている。

(田中委員)

ライフデザインプログラムは何かの手法なのか。誰かが提唱しているものなのか。

(団体)

色々な方がライフデザインに取り組まれている。市の事業でのメインファシリテーターは、梅本龍夫氏と臼井清氏であり、自身が経験したことを盛り込んで、ライフデザインという手法を教えている。

(深野委員)

団体は、どれくらいの期間・年数を活動しているか。

(団体)

2021年6月につながりあいずという団体を設立したので、3年目になる。

(深野委員)

現在は任意団体ということでよいか。

(団体)

法人格はまだない。但し、活動するのに資金面での課題は大きいため、いずれは法人化しようと考えている。

(川村委員)

会場借用が12,000円ということであるが、もっと低廉にできないか。

(団体)

参加する方が本音を出し合えるような環境づくりに資金を使い、チラシの作成費用やホームページの作成費用を低廉にしている。会場費については、スタッフ間で調整をして、参加される方に還元していけるようする。

(川村委員)

提案書等には記載はないが、地域活性化という視点はあるか。地元愛という言葉を使っているが、例えば喫茶店を使うときには材料をみんな地元産の物を使うなど地域活性と絡めることはイメージとしてあるか。

(団体)

事業の中では、参加者が集まる場所で、お菓子をを用意しようと思っている。会場近辺の老舗和菓子店のお菓子を使うなどを考えている。地域で活動をされている方がいるので、そのような方も活動に混ざり合って、思いを繋いでいく。つながりあい

ずは、人と人だけではないところも繋いでいきたい。会場やお菓子屋を繋いで、コラボした商品ができていたという事例もある。地域の仕掛け作りも意識してやっている。

(3) 劇団音乃屋 静岡支部
二次審査欠席

3 採択事業審査

ア 発言等

(事務局)

採点結果を参照し、委員長を中心に採択団体の決定をしていただきたい。なお、新規事業に採択される事業は、各審査委員の評価点の合計が260点以上であることを要する。各審査委員の評価点の合計が260点を超えた団体は、つながりあいの270点である。なお、特定非営利活動法人ルークスについては、得点133点である。

(川村委員)

特定非営利活動法人ルークスの事業については、パイロット事業で実施するよりは、担当課と団体がもう少し協議しながら事業を育てていく方がいいと感じた。審査の中で感じたのは、調査が足りていない部分があるということ。パイロット事業として応募されるのであれば、加害者更生プログラムに関わる団体のデータをもっと深掘りできていれば、よりよい企画になっていたと考える。また、近隣に関連団体が3団体あるのなら、どのようなプログラムがあるかなど、自分たちが連携した上で、提案するシステムを構築するような段取りをしていたら良かった。

(深野委員)

提案書の内容と実行性のギャップが大きくて、実施可能か判断ができなかった。システム構築はできると考えている。

(静賀委員)

どれだけの人が参加するかわからない。

(深野委員)

参加した人がそこから先にどのように支援されるのか、支援先でどのようにフォローしてもらえるかが見えなかった。

(静賀委員)

ポータルサイトを構築するだけなら、担当課でできる。支援先とのつながりが希薄というのは、担当課がフォローしつつ支援していけばよい。どうしても協働パイロット事業で進めたいのであれば、団体と担当課が来年に向けて力を合わせる必要がある。

(田中委員)

ポータルサイトの運営ではなく、大前提としてDV加害者更生支援の知識を運営側がどれくらい持っているかというところが必要。

(静賀委員)

静岡市はDV加害者更生支援についてゼロベースなので、1でも2でも加点したものを作成してほしいということで担当課は手上げをしてくれた。担当課としては、DV加害者更生支援の情報に繋がるポータルサイトを構築してほしいということだと思う。

(田中委員)

担当課と団体との事業内容についての擦り合わせがもう少しできているとよいと感じた。

イ 継続事業の採択可否

(事務局)

協働パイロット事業の予算だが、新規事業と継続事業の両方を合わせて2,430,000円である。継続事業分を抜いた金額、つまり新規事業採択に充てられる金額は1,133,900円になっている。つながりあいずが提案した事業費は、618,200円。1,133,900円の中には収まっている。

継続事業について審査をお願いする。

現状、一次審査の時点で仮決定ということになっている。

(深野委員)

まず、特定非営利活動法人しずおか環境教育研究会。タイトルは「若手先生がもう一步進める！「いつもの保育に自然体験を」研修」となっている。

(静賀委員)

行政の立場からの意見として、継続事業は団体側、それから協働で携わっている担当課も、伸びしろがある、効果があると判断して継続事業として提出しているものである。一次審査でも質問は出ず、採択の方向で仮決定になったものであるから、このまま採択決定でよいと思う。

もうひとつの大・小まち探検ゲーム開発は、回答書をいただいている。五合目と記載があるが、2年予定の内、1年が終わって五合目と言わざるを得ないだろうと思う。大谷・小鹿地区という今後の発展が見込まれる地区であり、その地区に特化した支援をする担当課はプロジェクトチームのようなものであり、いつまで継続するかわからない。提案書の内容が抽象的であり、質問に対する回答も抽象的で評価が難しい部分はあるが、担当課がこの地域のために必要であるとした上での提案であるので、こちらも採択でよいかと考える。

(深野委員)

自分もしずおか環境教育研究会の提案は採択でいいと思う。理事長の交代に伴い運営体制に変化があるかどうかは確認をしたほうがよい。

(川村委員)

若手先生がもう一步進める！「いつもの保育に自然体験を」研修は、いい試みだ
と思うので、ぜひ続けてほしい。もう一つのまちなびやも、成果が見えにくいとい
えば見えにくいですが、今年度やってもらい、その中で成果を自分たちなりにまとめる
という部分も加えられたらよい。

(田中委員)

しずおか環境教育研究会の方は深野委員と同じで、理事長が変更となったこと
が気になったが、実施するうちに実感が出てくるようなプログラムなので、継続で
よいと思う。まちなびやも、1年では成果が出ないと思うので、継続してやっても
らいたい。一度今までの事業を整理して、どこまでできて、どこができなかったと
いうのを確認して、次年度以降、自分たちでブラッシュアップできていくのではな
いかと思う。

(深野委員)

それでは、継続の2事業については、そのまま採択とする。続いて、新規事業提
案だが、ルークスについては、各審査委員の評価点合計が260点を超えていないこ
とから、非採択。つながりあいは、270点ということで採択とする。令和5年度
静岡市協働パイロット事業については、この3事業を採択でよいか。

(全委員)

異議なし

4 事務連絡

5 閉会

以上、この会議録が正確であることを証します

署名人 深野 裕士